

職場としての法律事務所

法律事務所職員 渡島 敏広

不安からはじまり、情けない自分に悲観しつつはじまった事務員。しかし意地も張った。生きていく上で避けることの出来ない問題を法律の側面で解決していく弁護士。それを少しでもサポートできる事務員を目指して。

◆◆法律事務所への入所の決断

「法律事務所で働く気はないか」。想像もつかない世界であり、自分がそんなところで使いものになるわけがない。能力をはるかに超える圧力で潰れてしまう姿だけは想像できた。躊躇した。「最初はみんな素人、やっていくうちに慣れる。大切なことは挑戦すること」と励まされ、お世話になることになった。

◆◆新人のたよりない法律事務

そこには先輩事務員がいたので安心していった。でも電話が怖い、人が怖い。緊張の連続である。2か月も経たないある日、執行官送達の手続指示。会社宛に届かずどうしていいかわからない。「ダメなら代表者へ送れ、いちいち帰って来るな、子供の使いじゃないんだ」と弁護士の一喝。やれやれ今度はうまくいった、と思った。ところがまたその一喝。社名・代表者の表示がない、つまり全くの個人宛にした送達である。対応に苦慮する弁護士。何が問題か未だわかっていない事務員。後日、事なきを得たが、自分のミスが元で大きな迷惑をかけてしまっていることに気がついたとき、電話が怖い・人が怖い、そして弁護士が怖い、が加わった。やはり入所前の躊躇は正しかったか、と反省で沈んだ。

◆◆子供の使いじゃないんだ、を励みに

現場で訂正する事態に迫られた。このまま持ち帰るとまたあの一喝が飛びそう。入所当時（1977年）、文書作成はタイプの時代。コピー機はあったが、大量なものは青焼きが主流。ワープロどころかファクシミリ機さえ未だない時代。出直しても自らタイプする技術もないし、その猶予もない。7つ道具を取り出し、その場でカーボンを挟んで何ページも書きまくった。依頼者にはつたない自分の文字で申し訳ないと思いつつも…。1人で何でも出来る事務員を目指すしか生きる道はない、貪欲に先輩の仕事ぶりを習い盗んだ。タイプにも挑戦した。

いつどんな事件内容の依頼が舞い込むかわからない。瞬時に対応を迫られる事態にも遭遇する。そこには個々の依頼者の事情などが微妙に絡んでいる。相談を受け親身になって法律サービスを提供し解決していく弁護士の仕事は大変だと思う。そのサポートをするのが事務員。だから責任も重大である。「事務員さんにも大変お世話になった。本当に助かった」とお礼を言われたよ、と弁護士からも感謝されたとき、なによりもやりがいを感じる。

日々努力する意欲と事務所のチームワークを大切に、より高い法律サービスの提供のため、その一助となる事務員を目指して。そして二度とあの一喝が飛ばないように…。